



# 自然観察

No.137  
2022.6月

## 目次

- 参加者の声 ..... 2
- ウォッチングレポート ..... 2
- フィールドニュース ..... 5
- 2022 フォローアップ研修会のご案内～ゼロから始める身近な自然観察～ ..... 8
- 2021 年度決算と 2022 年度予算 ..... 9
- 2022 年度北海道自然観察協議会総会終える ..... 11
- 「自然に遊ぶ～子供の頃の遊び (2)」 ..... 14
- 編集後記・連絡先 ..... 16



「ハルニレの実を食べているエゾリス」 蘭越町



## 参加者の声



東川町 「キトウシ」 観察会 2022/3/12

旭川市 兼平龍一

本日は貴重な機会を与えていただき誠にありがとうございます。

私は自然の中に居るのが大好きですが、それに関する知識が乏しい為、情報は限定的になります。今観察会は動植物に詳しい方が多数おられましたので心強い限りでした。又何より多くの方々と交流出来ました事はかけがえの無い一時となりました。次回観察会(5月21日神居古潭)にも参加し知識を深めたいと思っています。

## ウォッチングレポート



札幌市 「春の北大構内」 観察会 2022/04/29

札幌市 佐野 由輝

北海道大学キャンパスには、この一帯が湿地だったことの名残と大学設置後、国産、外国産含め様々な樹種が植えられていたり、外来種が侵入する等の背景があり、今の姿になっていることを説明した上で、キャンパス内を散策した。

まずは、2度の紅葉(春は花)を楽しめるアメリカハナノキの花の様子と春先に真っ先に葉を展開するブナの様子を観察した。その後、サクシュコトニ川沿いを歩き、元々の樹種であるハンノキに、植栽又は侵入したシダレヤナギ、ニワウルシ、ポプラが混在した姿、林床には、自生種であるキバナノアマナ、エゾエンゴサク、オオハナウドと外来又は移入種であるイワミツバやセイヨウタンポポ、ゴボウが競合している様子を観察した。大野池のミズバショウの可憐な姿を鑑賞した後、最後に、恵迪原生林と遺跡保存庭園で、落葉広葉樹林の林床を彩るエゾエンゴサク、アズマイチゲ、オオバナノエンレイソウなどの春植物が咲き乱れる様子を堪能した。

参加者の皆さんは、うららかな天気のもと、北海道の春の訪れを楽しんでいた様子だった。

小樽市 「旭展望台」 観察会 2022/04/29

小樽市 岡部 実

毎年4月29日の小樽地区の第1回観察会は少し肌寒くも穏やかな天候の中、実施されました。展望台へ向かう車道脇で、エゾエンゴサク、エンレイソウ、オオウバユリ、エゾイラクサを観察しながら、ツノハシバミの雄花と雌花の違いをじっくり観察しました。満開のカタクリ群落では、みんなで一年生のカタクリを探しました。

2時間ほど歩いて、遊歩道を抜けると、目的地である小林多喜二の文学碑があります。その前で一人の指導員が多喜二の生涯を説明した後、ウクライナへのロシアの侵略戦争が早く終結する願いを込めて、ハーモニカで「いつまでも何度でも」を演奏しました。この曲をウクライナ出身で、民族楽器バンドゥーラの演奏家であるナターシャ・グジーさんが透明で美しい歌声とともに演奏したのを聴いて感銘を受け、ハーモニカでの演奏を思い立ったそうです。ハーモニカの音色は春のそよ風の中で心にしみるものでした。



## 苫小牧市 「春の錦大沼」 観察会 2022/05/08

苫小牧市 白崎 均

今日の公園は、エゾヤマザクラが満開です。一般市民もたくさんの人達が春を楽しんでいます。コロナ禍の中12名が観察会に参加してくれました。コロナは必ずしも収束を迎えている訳ではありません。今後も何度も何度も襲ってくるようです。

そんな中での観察会、まして当観察会は相当年齢の高い人ですので、注意に注意を重ねてコロナから守っていかねばなりません。

スマレ、ホソバナアマナ、シロイヌナズナ、ネコノメソウ、ミズバショウなどが開花しています。これからが本番です。自然を大事にして、後世に伝えていきましょう。

## 恵庭市 「恵庭公園」 観察会 2022/05/14

恵庭市 久瀧 雅恵

空は前々日夜半から洩る、予想通りの雨。管理棟の軒先を借りての受付の後、雨は上がる。

エゾエンゴサクはほぼ終わり、園路脇に広がるニリンソウの中に、ミドリニリンソウを探して歩く。オオバナ・ミヤマ・エンレイソウ。ヤブニンジン、ホソバナアマナ、ルイヨウショウマ。ヤマネコノメソウは猫の目を現す。

アイヌ語シブツキナ（成長する草）とはバイケイソウ。ユキザサ、ワニグチソウ、オオアマドコロはまだ蕾。サワシバは雄花に遅れて雌花を伸ばし、ヤマグワの雄株雌株も其々小さな花房を下げる。

ユカンボシ川のノダイオウ、ドクゼリ。葉だけの、シャクとフクジュソウの見分け方。所々、園路を埋めるカンパ類やヤチダモの雄花。下がりだしたミズナラ、オニグルミの雄花。

昨年初めて確認したエゾノウワミズザクラは驚くほど花数を増やしていた。「降らなくて良かったね」と口々に言い合って、観察会は終わりました。

## 小樽市 「オタモイ・赤岩」 観察会 2022/05/15

小樽市 及川 慶子

5/15 晴天に恵まれてのスタートとなりました。

総勢14名、小樽・山中海岸への下り坂手前の、出羽三山から歩き始め、しばらく登りが続く道すがら、足もとの植物を観察。スマレの種類の見分け方や、参加者から植物の情報を聞いたり、オオカメノキやオクエゾサイシンの撮影。また、登りの途中でシラネアオイが咲いているのを見て、皆さん感激！

登るにつれて息が切れ、何とか休みながらも最終地点へ到着。ご褒美のような絶景が広がります。そこで高谷指導員より、赤岩の地形の成り立ちの説明を聞き、その後、ひたすら青い海の色に見とれながら休憩。帰り道では、マムシグサが4～5本固まって出ているのに驚きました。下山開始から約1時間、参加者一同無事下山し、観察会を終えました。



石狩市 石岡 真子

5月の観察会で防風林に残雪があったことは、初めてでした。この冬の大雪の際の除雪のしわ寄せが防風林に及んだようです（写真①）。

石狩市には多数の防風林があります。明治26年、原野を開拓した時、伐採せずに防風林として残された部分で、ほとんどが天然林（自然林）です。花川南防風林の南端の発寒川に近い所に、ドロノキやチリメンドロ（ニオイドロ）があります（写真②）。林内の林床には、数日間の陽気のせいでオオタチツボスミレは散ってしまい、オオバナノエンレイソウも少なく（写真③）、クルマバソウ、マイヅルソウ、オオアマドコロが咲き始めたばかりで、触ると危険なツタウルシがやけにつやつや光っていました。エゾノウワミズザクラは林内の数か所で叢生しています（写真④）。絶滅危惧のランクの高いクロミサンザシはつぼみを数多くつけていました（写真⑤、⑥）。イタヤカエデ、ハウチワカエデ、エゾノクロウメモドキ（♂）ミズナラ、エゾニワトコなどの花を、近くで観察することができました。以前は、トクサが優占していましたが、ササがとって替わり、地下水位の低下が案じられています。6000年前の海岸線である紅葉山砂丘の名残は、防風林西側の市道から、法面（のりめん）を断面として見ることができます（写真⑦）。

発寒川に架かる横井橋の露出管は、水道管ではなく、石狩湾新港の洋上風力発電所の特別高圧送電管です。市道に埋設された送電線上で防風林を観察することもあるこの観察会が、果たして今後楽しく続けることができるのか、心配しているところです。



①この冬の除雪のしわ寄せは防風林に及んだ



②チリメンドロ（ニオイドロ）の木前で



③オオバナノエンレイソウ



④エゾノウワミズザクラ



⑤クロミサンザシの前で



⑥クロミサンザシのつぼみ



⑦紅葉山砂丘の断面（道路のり面）

## タンポポのことなど

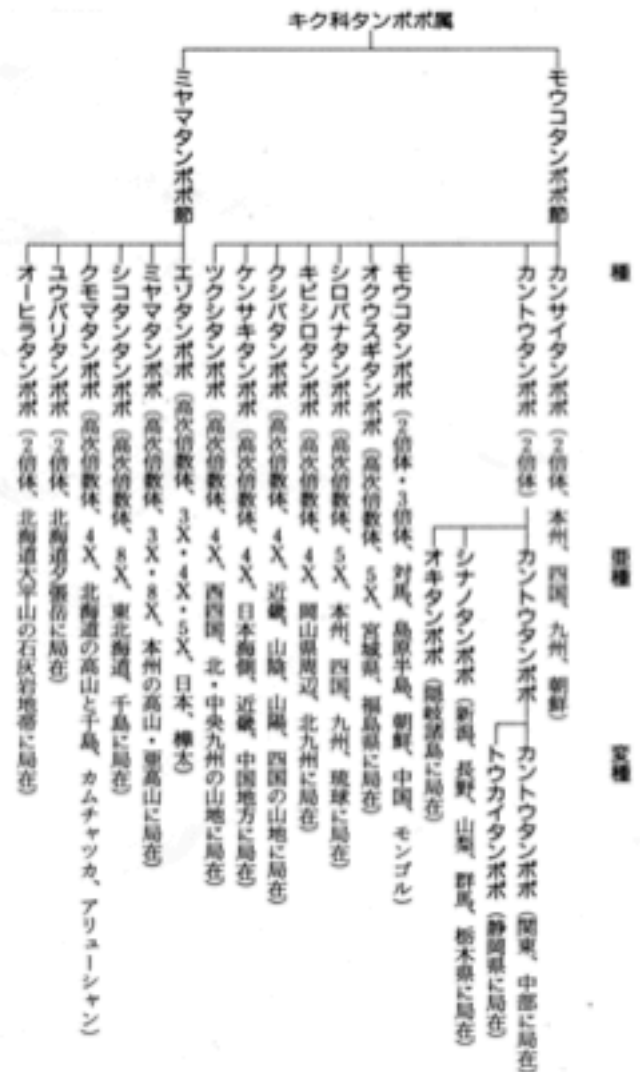
札幌市 山形誠一

誰もが知っている雑草の代名詞とも言えそうなタンポポ。身近に見られるそのほとんどがセイヨウタンポポやアカミタンポポと呼ばれる外来種であり、もともと北海道にあったエゾタンポポは、とても少なくなっていることは、今では多くの人に知られるようになってきました。明治の初めに札幌農学校（北大の前身）の教師ブルックスによりサラダ野菜として栽培されたものが逃げ出したとも、真駒内に記念館のあるエドウィン・ダンが牧草として導入したとも言われているセイヨウタンポポ。 わずか百年あまりで全国制覇を成し遂げたその秘密は、受精なしに種を作ることのできる無融合生殖、在来種に比べ軽く飛びやすい種、などいくつかの生態的理由をあげることでもできますが、なんとといっても、日本中の隅々にまで道路を通し、河川を改修し山を切り開き沢を埋め立て、都市を拡大した人間の影響を忘れることはできません。競争力が弱く、かく乱に依存するセイヨウタンポポにとって、開発によって出現する空き地は、絶好の生息場所となるからです。70年代あたりから盛んに言われた「外来種が在来種を駆逐する」という言い方は<sup>1</sup>、セイヨウタンポポにしてみれば、「ちょっと待ってくれ」と言いたいところでしょう。

いずれにしても都市化の進んだところにはセイヨウタンポポ、以前からの自然の残る所には在来種のタンポポという見方はできるのではないのでしょうか。そのため全国各地で行われている自然度調査にもセイヨウタンポポと在来タンポポの分布状況が利用されています。

それでは在来種といわれるタンポポはいったい何種類あるのでしょうか？実はタンポポは非常に分類の難しい植物で、研究者によってその数は異なっています。右の表は95年に新潟大学の森田竜義教授がまとめたもので、それまで煩雑だった在来種を15種にまとめ、北海道にはエゾタンポポほか4種が分類されました。表からも分かるように、有性生殖をする2倍体は、ユウバリタンポポとオオヒラタンポポの2種だけで、残り3種は、倍数体で、外来種と同じく無融合生殖者です。

ところで01年に実施された環境省の「身近な生き物調査」でちょっと面白い結果が報告されています。全国から集められたセイヨウタンポポとみなされた個体を解析したところ、全体の85%にあたる個体が、外来タンポポと在来タンポポの雑種だったということです。最近の調査からもそのことは確認されています。一般的に3倍体からは、正常な花粉が出来ないとされていますが、ごくまれに受精可能な花粉が出来ることがあり、それが在来2倍体種との間で雑種を作ることのようです。



タンポポは、最も研究の進んでいる植物のひとつです。これからもどんな面白い発見があるか、本当に目が離せません。

脚注1 1972年4月15日の毎日新聞の家庭欄に「追われゆくニホンタンポポ」という小さな記事が掲載されました。記事自体は特にセイヨウタンポポを悪者扱いするようなものではないのですが、見出しが「追われゆくニホンタンポポ」「身近からほとんど消えた」「はびこる西洋種のため」と誤解を招くような表現でした。そしてこの頃から、外来種に対する風当たりが強くなり始め、セイタカアワダチソウ、オオハシゴソウ、ニセアカシヤなどの駆除へとつながっていきます。この記事が書かれてから今年でちょうど50年、寛容さが失われ、二元論的な言説ばかりがはびこる世の中で、外来種問題についても、日本のお家芸である「玉虫色」の「落としどころ」で「丸く収める」ことを考えてみるのも良いかもしれません。



## 蘭越町港地区 海岸の植物の再調査計画について

蘭越町 大表 章二

筆者は2016年5月～9月に蘭越町港地区の海岸の植物の調査を実施し、その結果を「蘭越町港地区 海岸の植物48種」(2016年)としてまとめた。

その後、植物研究者の桑原義晴氏の「後志の植物」(1966年)を参照したところ、筆者の調査で未確認の種がいくつも載っていた。

なぜそのような結果が生じたのか?①筆者の調査能力、同定能力が劣っていたためか? ②開発行為など環境の変化に因るのか? ③その両方か?それを確かめたいと思い、以下の3点について2022年に再調査を実施することにした。

### 1、これまで筆者が本地区を含め町内で確認していない種をさがす。

桑原氏の著作にあり、筆者のリストにない種を書き出してみた。ジュンサイ(ジュンサイ科) シオデ(サルトリイバラ科) ヒロハヘビノボラズ(メギ科) オクトリカブト(キンボウゲ科) チャボカラマツ(キンボウゲ科) ホソバエゾキリンソウ(ベンケイソウ科) イソスマレ(スマレ科) キバナノカワラマツバ(アカネ科) ホタルカズラ(ムラサキ科) ムシャリンドウ(シソ科) カムイヨモギ(イワヨモギ)(キク科) トキンソウ(キク科) エゾホタルサイコ(セリ科) オオカサモチ(セリ科)の14種である。現在和名にはなっていないと思われるホソバエゾキリンソウを除く13種が港地区に生育しているか探して見ようと思う。



港地区海岸遠望(風車が林立する前)

## 2、イグサ科、カヤツリグサ科、イネ科も調べる

2016年の調査で、この3つの科は一部の種を除いて調査対象から外したが、その後同定経験を積んだので、それらの科に属する種についても調査に当たりたい。

桑原氏が記載しているのは以下の16種である(テンキグサとコウボウムギは除く)。イグサ科のスズメノヤリ、カヤツリグサ科のコウボウシバ、シカクイ、イネ科のハマチャヒキ、カモガヤ、ハムムギ、カモジグサ、ウシノケグサ、オオウシノケグサ、コメガヤ、ススキ、ムラサキススキ、アイアシナガハグサ、ハネガヤ、シバである。



港地区海岸砂浜

## 3、桑原氏の著作になく筆者のリストにある種を点検する

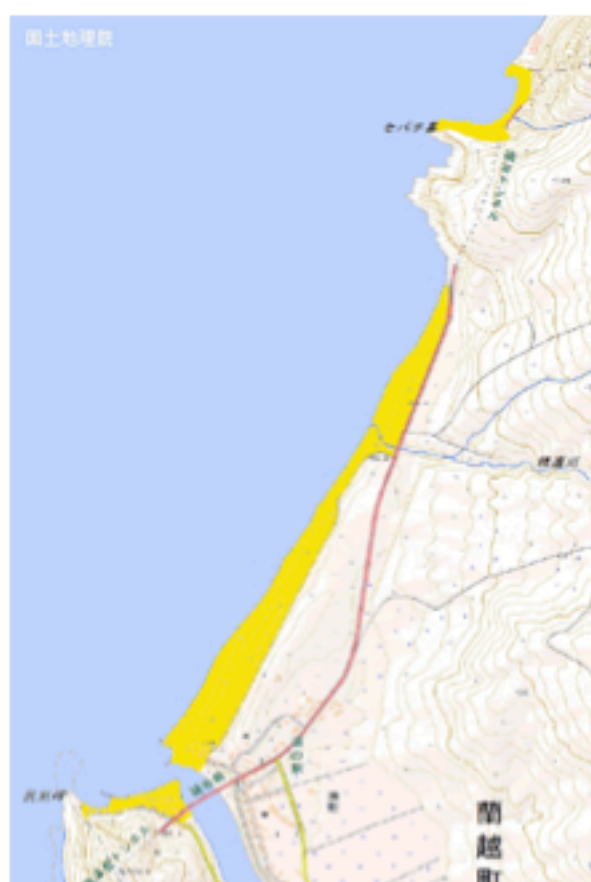
センニンソウ(キンボウゲ科) キリンソウ(ベンケイソウ科) ヤマハギ(マメ科) ヒロハクサフジ(マメ科) オニハマダイコン(アブラナ科) アキノミチヤナギ(タデ科) ギシギシ(タデ科) エゾノカワラマツバ(アカネ科) ネナシカズラ(ヒルガオ科) オオアキノキリンソウ(キク科) キタノコギリソウ(キク科) ハチジョウナ(キク科)の12種である。

桑原氏の研究と筆者の調査には少なくとも半世紀の隔りがある。植物学の大家である桑原氏に対し、筆者は一市民調査員に過ぎず、同定精度に格段の隔りはあるだろうが、比較検討することによって港地区の海岸の植物の変遷が多少でも明らかになることを願う。

蘭越町史編集委員の天野氏は「蘭越町史」(1964年)の中で次のように述べている。

「港町海岸では、初夏から秋にかけていろいろな海浜植物が咲き乱れ、6月中旬から7月下旬までは、ちょうど高山のお花畑を思わせるような美しさである。」「この地帯の海浜植物群落は規模は小さいが、最も種類に富んだ、また最も美しい植生地帯である。学術の面からも、また観光の面からも、町民の協力によって十分の保護と保存に努めたいものである。」同感である。

(実施内容については、次号の会報で報告したい)



蘭越町港地区 再調査範囲

2022

8/27 (土)

9:45~13:15

9:30受付 小雨決行

集合:余市水産博物館前

開催:水産博物館周辺

(余市郡余市町入舟町21)

※TEL 0135-22-6187



北海道自然観察協議会主催

2022フォローアップ研修会のご案内

# 「ゼロから始める 身近な自然観会」

新指導員の皆さん、宜しければ是非ご参加ください。

研修: 観察会事例の紹介  
が 什 事項の交流

募集定員: 先着 12名

最少開催: 5名

参加対象: (限定)

⇒2022養成講座受講者

留意事項等、詳細は8/15  
(月)迄に参加者へ直接連絡

コロナ禍等対応実施

1次判断 8月10日(水)

積丹半島の歴史ある余市町の豊かな自然にふれ、自然観察会を始めるポイントを学び合いませんか。



- 講師 吉田陽子 (2019登録自然観察指導員)
- 協力 鳥澤哲子 (余市町在住会員)
- 交通 各自家用車など (水産博物館駐車場奥に駐車)
- 参加費 会員200円、未会員300円(傷害保険料・乗代~当日徴収)
- 持ち物 雨具、軽昼食・飲み物、散策靴等、防虫剤、筆記用具など
- 報告 氏名・住所・連絡先(携帯番号、メールadd)・性別・年齢(保険加入上)

- 参加申込先 北海道自然観察協議会研修部(相原)  
携帯090-3897-5392 ※LINE可  
E-mail kinetics58@gmail.com
- 申込期間 **6月19日(日)~ 7月15日(金)**



# 2021年度決算と2022年予算

## 2021年度決算

2022年3月14日

収入の部

単位(円)

項目	21年度予算(A)	21年度決算(B)	備 考
前年度繰越	244,364	244,364	
会費	380,000	210,000	年会費(複数年会費納入分含む)
観察会・研修会参加費	40,000	35,655	2020年度観察会参加費(保険料)、夏休み親子自然観察会参加費
積立金取り崩し	0	0	
雑収入	1,000	0	利息など
その他	0	0	
合 計	665,364	490,019	

支出の部

単位(円)

項目	21年度予算(C)	21年度決算(D)	備 考	
事務費	通信費	40,000	4,150	郵券代
	HP管理費	30,000	40,000	ラビュールHP管理費40,000円(2020年度、2021年度分)
	消耗品・雑費	25,000	6,340	事務関係書籍経費、搬送料・イン代・コピー用紙代など
	会議費	120,000	83,540	理事会・三役会・編集部作業旅費補助(2020年度分)・会場費など
	その他	0	910	チラシ配架時交通費
<小計>	215,000	134,940		
会報費	会報郵送費	80,000	67,698	会報発送時郵便代(メル便 3回)
	会報印刷代	150,000	147,400	会報発行費(3回)封筒印刷代含む
	通信費・搬送料	10,000	990	編集関係郵券、搬送料
	消耗品・雑費	10,000	550	文具代など
	編集会議費	15,000	0	編集会議会場費、編集会議補助
<小計>	265,000	216,636		
活動費	観察会費	20,000	4,773	参加者保険料 保険料返込手数料 雑費など
	総会開催費(兼講演会)	0	0	2021年度総会時研修(講演会)なし
	全道研修会助成	0	0	2021年度開催なし、(2022年度より隔年実施)
	地方ブロック研修会助成	25,000	0	地方ブロック研修会開催中止
	フォローアップ研修会	15,000	0	旭川地区スキルアップ研修会開催中止
	自然観察指導員講習会	75,000	0	2021年度開催中止
	夏休み親子自然観察会助成	2,000	0	資料代として
	消耗品・雑費	10,000	10,296	コピー用紙代、印刷代、文具代など
	通信費・搬送料	5,000	2,388	活動関係郵券代、搬送料
	団体加入費	3,000	0	高山植物ネットワーク加盟費
<小計>	155,000	17,457		
予備費	364	0		
特別会計積立金	30,000	0		
合 計	665,364	369,033		

収支残高 総収入(B)490,019-支出合計(D)369,033=120,986 翌年度繰り越し

2022年3月14日 上記の通り決算報告します

会計 加藤秀史



2022年3月14日 上記に関する監査を実施し、適正であることを認めます。

監事 佐藤佑一



小林保剛



## 2022年度予算(案)

2022 3.27

収入の部

単位(円)

項 目	21年度予算(A)	21年度決算(B)	22年度予算(C)	増減(C-A)	摘 要
前 年 度 繰 越	244,364	244,364	120,986	-123,378	
会 費	380,000	210,000	380,000	0	年会費納入見込 190名×2000円
観察会・研修会参加費	40,000	35,655	35,000	-5,000	観察会参加費(保険料) 研修会などの参加費
積立金取り崩し	0	0	0	0	
雑 収 入	1,000	0	0	-1,000	利息など
そ の 他	0	0	0	0	
合 計	665,364	490,019	535,986	-129,378	

支出の部

単位(円)

項 目	21年度予算(D)	21年度決算(E)	22年度予算(F)	増減(F-D)	摘 要	
事務費	通信費	40,000	4,150	5,000	-35,000	郵便代など
	HP管理費	30,000	40,000	30,000	0	ラビュールHP管理費20,000円+HP運営費10,000円
	消耗品・雑費	25,000	6,340	10,000	-15,000	事務局関係諸経費、送込料・郵便代・ink代・用紙代など
	会議費	120,000	83,540	30,000	-90,000	理事会・三役会・編集部作業旅費補助・会場費など
	その他	0	910	0	0	
<小計>	215,000	134,940	75,000	-140,000		
会報費	会報郵送料	80,000	67,696	70,000	-10,000	会報発送時郵便代(メール便 3回)
	会報印刷代	150,000	147,400	140,000	-10,000	会報発行費(3回)封筒印刷代含む
	通信費・振込料	10,000	990	5,000	-5,000	編集関係郵便代・振込料
	消耗品・雑費	10,000	550	5,000	-5,000	文具代など
	編集会議費	15,000	0	8,000	-7,000	編集会議会場費・駐車場など
	<小計>	265,000	216,636	228,000	-37,000	
活動費	観察会費	20,000	4,773	10,000	-10,000	参加者保険料 保険料振込手数料 雑費など
	創会謝辞費(講演会)	0	0	15,000	15,000	2022年度創会時研修費(講演会)
	全道研修会助成	0	0	80,000	80,000	2022年度より隔年実施
	研修会助成	40,000	0	20,000	-20,000	地方ブロック、スキルアップ研修会講師謝礼・運営補助費として
	自然観察指導員講習会	75,000	0	90,000	15,000	2022年度開催予定
	資料代として	2,000	0	1,000	-1,000	資料代として
	消耗品・雑費	10,000	10,296	10,000	0	コピー用紙、印刷代、文具代など
	通信費・振込料	5,000	2,388	3,000	-2,000	活動関係郵便代、振込料
	団体加入費	3,000	0	3,000	0	高山植物ネットワーク加盟費
	<小計>	155,000	17,457	232,000	77,000	
予 備 費	364	0	986	622		
特別会計積立金	30,000	0	0	-30,000		
合 計	665,364	369,033	535,986	-129,378		

# 2022年度 北海道自然観察協議会総会終える

事務局

令和4年4月3日(日)、札幌エルプラザ2F 環境研修室1・2において19名が参加して総会が行われました。横山会長からの挨拶後、議長は中村理事、記録に田守理事が選出され、議事進行となりました。議事は1号議案から4号議案、並びに役員改選等が提案され、全議事が満場一致で了承されました。以下に提示資料を補足する形で状況を報告します。

## 横山会長挨拶要旨

- ・コロナ禍は三年目になっており、道内での感染者総数は22万人超えなど、依然として厳しい状況です。引き続き気を緩めないで各活動に励んでもらいたい。
- ・コロナ禍の影響もあり、2021年度の事業報告の内容は厳しい状況となっています。このため、理事会でも課題等に関して議論を開始したところ。
- ・会長職をお引き受け時は、2期4年が申し送り事項でしたが既に5期10年、体力的に厳しいので2022年度は新会長のもと、活動を継続頂きたい。

## 1号議案(2021年度事業報告)

### 1. 観察部所管事項

- ・観察会の実施状況の各数値に関して、2月5日取りまとめの議案を3月31日版の最終報告があり開催数等各数値の訂正報告があった。最終的な状況は、
  - ・開催数39(開催数15、中止24)
  - ・延べ参加者数(一般136人、指導員56人)
  - ・一般参加者年代(70代以上83人、60代25人、50代6人、40代以下22人)

### 2. 研修部所管事項

- ・コロナ禍で地方ブロック研修会とフォローアップ研修会が中止となった。
- ・地方ブロック研修会に関しては、次回、全道研修会に統合を予定している。

### 3. 編集部所管事項

- ・会報に関しては、計画通り年3回発行し関係者に送付したが、コロナ禍の影響で観察会の中止が相次ぎ原稿の集まりが悪かった。
- ・ホームページに関しては、会報サムネール表示に原因不明の不具合が連続している以外は、情報提供中。
- ・オンラインに関しては、Zoom以外にJitsiMeet利用を試み、無料かつ時間を気にすることなく容易にオンラインを行うことができることを確認した。

### 4. 実行委員会事項

- ・2021年度は北方自然教育園で実施した。今年度も引き続き実施予定。

### 5. 事務局所管事項

- ・コロナ禍の影響で中止した山本牧理事による講演会であったが、本日、漸く開催することができた。懇親会に関しては、残念ながら中止とせざるを得なかった。
- ・今年度の観察会の予定表、指導員講習会について、会員各位には配布に関して協力頂きたい。

## 2号議案(2021年度決算報告、監査報告)

- ・収入に関しては、会費減が影響し49万円余となっている。(対予算比▲17万円)
- ・支出の事務費は、リモート実施するなどして予算を下回った。
- ・支出の会報費に関しては、ほぼ前年度並みであるがその他の費用支出が減少し予算を下回った。
- ・支出の活動費に関しては、コロナ禍の影響で観察会活動の減少、研修会/講習会の中止の影響で大幅減となった。
- ・特別会計積立金については、手持ち資金不足の影響で積み立てる事ができなかった。
- ・総じて手元資金の不足が続いており厳しい台所事情であり、繰越金が12万円余と前年度の半減せざるを得ない状況である。
- ・会計に関しては適切に行われていることを報告する。(監事)
- ・活動費として高山植物ネットワーク加盟費決算額が0円となっていることに関して、その理由の確認があり、コロナ影響で中止となった事による説明があった。

### 3号議案(2022年度事業計画案)

#### 1. 観察部所管事項

- ・今年度観察会は「夏休み親子観察会」を除き40開催が予定。ウォッチングガイド、ホームページで紹介する。
- ・コロナ禍における観察会実施の留意点について理解が進んできたので、今年度は、催行、中止の判断を各観察会実施者に一任する。なお、中止とした場合は観察部まで連絡頂きたい。

#### 2. 研修部所管事項

- ・8月20日(土)9:00から予定のフォローアップ研修は、8月27日(土)9:45からに変更する。対象は養成講座受講者から12名。
- ・フォローアップ研修に関しては、中期的に開催検討してきたが、コロナ禍以外にも受け入れ先の体制変更による影響、必要経費のやりくりなど不確定要素が多い。

#### 3. 編集部所管事項

- ・会報発行は、従来どおり年3回発行を予定。

#### 4. 実行委員会事項

- ・NACS-J自然観察指導員講習会北海道2022は是非とも実施したい。

#### 5. 事務局所管事項

- ・8月27日予定の理事会は、フォローアップ研修の日程変更に関連して変更を計画する。
- ・40周年記念事業(2025)は予算が厳しく収支が見通せない現状であることから、今後の状況を見て検討する。
- ・「あり方検討会」を先ほどの理事会で理事会の中に設置した。これから、会の課題の掘り起こし活動内容等を総点検し、提言することとした。
- ・従来観察部会計は独自であったが事務局会計に組み込むこととした。
- ・「あり方検討会」に関して検討状況の確認質疑があり、様々な課題を整理、検討開始したところである旨説明があった。

### 4号議案(2022年度予算案)

- ・収入に関しては、会費収入が減少しており、対前年度より13万円近く減の予算となるなど大変厳しい状況に陥っている。
- ・このため、2、3年間未納の会員に対しては、次号会報郵送の際に、個別に支払いのお願いをするなどして、収入維持に努めたい。
- ・支出の事務費については、実績ベースで計画したので従来の予算ベースよりも極めて厳しい状況となっている。今まで以上に経費節減が求められる。
- ・会報費に関しては、厳しい収入状況ではあるが、年3回の印刷と会員への郵送の計画とした。
- ・活動費に関しては、全道研修会助成、事前観察指導員講習会経費は従来通り計画した。

### 役員改選

- ・横山会長、佐藤事務局長から退任の挨拶があり、谷口理事(苫小牧市)については退任の紹介があった。2022年度新人理事として、松井理事(小樽市)の就任挨拶があった。

- ・会長及び事務局長の退任に伴う次期会長・事務局長の選出については、諸般の事情で選出できず、当面、未就任のままで行くことになった。但し、業務の遂行上、支障が生じない様に、両副会長がスムーズに業務が出来る様にするため各理事が積極的に協力支援していくことになった。なお、2022~2023年度役員・理事は以下の通り

日下部 久(副会長1年 再任)、山形誠一(副会長1年、観察部長 再任)、加藤秀史(事務局会計、再任)、鈴木ユカリ(事務局広報、再任)、相原繁喜(研修部長代行、再任)、村元健治(編集部長、再任)、田守真一(編集部・HP担当、再任)、小川祐美(事務局会計補助 再任)、山本 牧(再任)、原部 剛(再任)、大表章二(再任)、三澤英一(再任)、久滝雅恵(再任)、小山正美(編集部、再任)、吉田陽子(研修部、再任)、中村修一(再任)、松井典彦(新任)、佐藤佑一(監事 再任)、小林保則(監事 再任)

※退任 横山武彦(会長)、佐藤 修(事務局長)、谷口勇五郎(理事)

(参考) 総会後の記念講演会が北海道新聞(4月12日)に掲載されました。

# アーバンベア 人慣れ対策必要



山本さんは1978年とく、人への警戒心が薄れ、91年、2011年の道内の畑でアントコリンや果実をヒグマ分布図を示し、「道食い荒らすなど行動も大胆が春クマ駆除を1990年に廃止して以降、推定生息数に上方偏に倍増したが、単に数が増えたただけでな

北 区 市内の市街地周辺にも近年出没が相次ぐ「アーバンベア」の背景を探る講演会(北海道自然観察協議会主催)が3日、札幌エールプラザで開かれました。道内のクマ研究者らでつくる「ヒグマの会」副会長で、旭川周辺の里山を保全、活用するNPO法人「もりねっと北海道」代表の山本牧さん(66)が、「今どきのヒグマ事情」と題し、三角山で3月、クマと遭遇した調査員2人が負傷した事故や、昨年、東区の市街地や旭川市の河川敷に出没したクマを事例に、対策を提言しました。

(宮藤高広)

「ヒグマの会」山本さん提言



都市部に出没するクマの背景と対策を講じる山本牧さん

少、人慣れクマの増加を挙げました。

クマの都市部周辺への生息域拡大について、野幌森林公園に2019年、旭川市中心部の河川敷に昨年出没した「若クマ放浪」、東区の住宅街に昨年出没した「雄クマ繁殖行動」、3月に登山道から1000坪の地点で2人が襲われた三角山の「雌クマ定着、子育て」の3段階を示しました。

三角山でクマの冬眠穴を調査中に2人が負傷した事故に關して、「子連れの母グマだったので攻撃性が強かった可能性がある。確認

## 自然観察協講演会「リスク回避 地域全体で」

調査の方法などは再検討が必要だろう」と指摘。2人の行動については、「攻撃されても、互いにクマ撃退スプレーを噴射するなど仲間を守る行動をとっており、命を守る結果につながったと見なすべきです」と述べました。

クマに出合ったときの基本は、落ち着いて静かに離れること。特に人が複数いるときの事故例は少ない。「止まれ、逃げるな、集まれ」という原則を覚えてほしい」と強調しました。

山本さんは、40年以上研究を続けるクマの食性について、「かつてはおやつ程度だった農作物だが、住民やハンターの減少が進んだ今では、楽して食べられるおいしいものと学習し、夏場の主食になってしまった」と報告。特に栄養価の高いアントコリンの作りかけが農地帯で増え、丈が高くと付かない畑で餌食するクマの人間接近が常習化しているといいます。

都市部に出没する「アーバンベア」対策については、「河川敷などの通り道対策も必要だが、根本は里山や農地で起きている人慣れ問題。農業被害を農家個人の損失と考えず、地域全体のリスクという防災的な視点で、近くなってしまう人とクマとの距離を、緊張感あるものに立て直す公的な組織や対策が必要」と締めくくりました。

## 『自然に遊ぶ ～子供の頃の遊び～』 (2)

村元健治・北海道自然観察協議会理事

### ③山菜獲り

山菜獲りは、子供にとって遊びそのものというより、遊びを兼ねたものだった。

長い冬もようやく終えた3月の下旬頃になると、南側の崖淵、川淵はもちろん沼地などがいち早く、雪が溶け山菜などが出始めた。

山菜獲りにはよく出かけたものだ。最初の山菜獲りに行くのが、ヤチブキ(エゾノリュウキンカ)獲りだった。我が家から3kmほど離れた旧河川跡とか小さな沼地がその採取場所だった。

春浅い時期だったので、まだ小さいものだったが、真っ黄の花を鮮やかに咲かせているものもあり、それらも含めて夢中で獲った。

獲る場所によっては、かなり足がぬかるようなところもあって気を付けなければ、思わず足が沈みこんでしまい慌てて引き上げなければならぬこともあった。そうした危険を冒してまでの収穫だったので、最後の1葉も残さず、美味しく頂いた。

このヤチブキより1カ月ほど遅くなるが、やはり湿地で獲ったものがセリだった。今日では栽培物が主流だが、私が獲ったのはもちろん野生のものだった。ヤチブキと同じような場所に生えていたので、獲る時、やはり足が抜からないように気を付けなければならなかった。同じセリでも陸に生える猛々しい感じの「ドクゼリ」もあったが、食用は水の中にあったので、間違えることは無かった。今日の店で売られている物とはかなり違って、香りが強くて非常に美味だった。

この後、毎年、必ず獲りに行ったのがフクベラ(ニリンソウ)だった。これは主に川べりのものを採取した。落葉樹の下にほとんど群落で生えていたので、採取は簡単だった。これもヤチブキと同様、おひたしで食べたが、ヤチブキと異なり苦味もほとんどなく大変、食べ易いものだった。

長い冬から開放された春の暖かい日を選んで、家族の食卓を賑わすというか、重要なオカズの1品を担うことにもなる山菜獲りは、家族に大手を振って取りに行ける遊びでもあった。鳥のさえずりを聞きながら、春の陽光を背に一杯浴びて夢中になってやった山菜獲りは、至福のひとつだった。子供の時から馴染んでいるこの山菜獲りは、大人になっても止められず今でも春になると、近くの里山に行ってフキ、コゴミ、タランボ、アズキナ(ユキザサ)などを獲ってきては食べている。

この山菜獲りこそ、今や懐かしい子供時代を鮮明に思い起こす貴重な機会になっていて、死ぬまで止められないようだ。



ヤチブキ(エゾノリュウキンカ)



アズキナ



フクベラ



コゴミ

## ④野イチゴ採り

イチゴと言えば、今日の人々は、栽培した物しか知らないと思われる。私が子供の頃は、田舎だったので、栽培されていたイチゴは売られていなかった。その代わりに野生のイチゴがふんだんにあった。その野生のイチゴを嫌と言うほど摘み取って食べたのだ。この野イチゴ採りは、初夏に行なうものだった。

その頃、私の地方は、まだ酪農の基盤である草地造成が本格的に行なわれていない時代だったので、周りには野原(原野)がかなりあった。その野原に当時、人々がフレップと呼んでいた野生のイチゴ(エゾノクサイチゴ)がそれこそたくさんあった。高さが5~6cmくらいのもので、花も白い小さなもので可憐だった。

この花が散って間もなく、真っ赤に熟した実がなった。その時を待っていた子供たちは、その熟したイチゴを夢中になって片っ端から口に放り込んで食べたが、その旨さは格別だった。この真っ赤に熟した野イチゴが原野の一面に占めている様は、赤絨毯(ジュータン)を敷き詰めたように見えて圧巻だった。そのような場所を見つけたら、それこそ宝物でも見つけたように、大きな歓声を挙げて走って行ったものだった。

小さい実なので、幾つかまとめて口に放り込んだが、大きめの物は1個のまま放り込んだ。そんな時に限って、口の中に突然、異臭が広がって思わず食べた野イチゴを吐き出すことが時折あった。これは子供達に「屁ツタレムシ」と呼ばれていたカメムシが完熟した実に喰らい付いていたのを知らずに口に放り込んだため、そのムシが逃れるため異臭を放ったために起きたことだった。とにかく、その臭さと言ったら、猛烈なもので思わず、瞬間的にベッと吐き出すほどだった。そのようなことがあったものの、とても甘くて香しい匂いのする野イチゴは子供たちにとっては大変、魅力的な食べ物だった。あまりにもたくさんあったので、よくボールとかアルミの弁当箱を持って採りに行った。

イチゴの群落に分け行って、座ったままの状態でも手を伸ばしただけでも十分に収穫できた。それら容器にピッシリ採ったものを家に帰ってから砂糖をまぶして食べると、ウツトリするような美味しさであった。甘いものが好きだった私には、最高のご馳走だった。

この素晴らしい宝石のような野イチゴも、その後の草地開発等によりほとんど姿を消してしまった。残念、極まりない。

なお、本文中にある当時の人々が呼んでいたフレップは、野イチゴではなく正式には常緑小低木である「コケモモ」と称されるものを指す。その熟した実はジャムに利用される。

## ⑤カラスのヒナ取り

カラスと云うと、一般の人々はゴミステーションでゴミ漁りをしたり、子育て中に人を攻撃したりするというように、あまり良いイメージを抱いていないと思われる。

もちろん私も、そう思っているが、しかし他面では童謡の「7つの子」でも唄われる様に、カラスは鳥たちの中でも非常に自分の子を可愛がるものだという身ををもって体験したことからもいる。

それは私が小学校5年生の時のことで、季節は初夏の頃だったと思う。カラスの子であるヒナのことで強烈に忘れられないことがあった。それはカラスの巣の中にいるヒナを取ろうとした時のことだった。カラスの巣と言うのは、太くて高い木の上に結構大きな巣を作るものだが、私が見つけた巣もそのようなものだった。カラスはヒナから育てると人間に非常に懐(なつ)くと聞いていたので、その巣の中のヒナを取ろうと思った。



太い木を登り始めると、カラスの親達が気づいて騒ぎ始めてヒナを取られまいと威嚇しながら私を攻撃してきた。私は、そんなことに脅えず少しずつよじ登って巣に近づいていった。そのうちに私が諦めないで、親カラスたちが、突然、巣から離れて空高く舞い上がって、大きな鳴き声を出しながら何処かに飛んで行ってしまった。私は「しめた！今のうちに取ろう」と思っていたら、何処からともなくたくさんのカラス達が木に登っている私の方に飛んできた。どうも親カラスが仲間に助けを求めて呼びに行っていたようだった。

その後起きたことは恐怖の一言で、さながらヒッチコック映画の「鳥」のシーンのような凄まじい光景になってきた。集まって来たカラス達は、ヒナの親を含めて20~30羽あまりにも達してきた。それらカラス達が一齐にガアー、ガアーと恐ろしい鳴き声を挙げながら、次から次と私めがけて急攻撃。私の顔近くすれすれに突撃してくるのだ。これには私もすっかり、恐ろしくなって震えがりホウホウの体で木から飛び降りた。巣の中には、予想に反してヒナはおらず、代わりに斑点の付いた緑色の綺麗な卵が鎮座(ちんざ)していた。

私は、この時のカラスたちが行った一連の決死の行動に非常に驚いたが、同時にカラスの子に対する深い愛情というものを目の当たりにして感動すら覚えたほどだった。



(カット・前田満・元林業試験場北海道支場研究員)

#### (編集後記)

収まってはいないコロナ禍ですが、皆様それぞれに対策を工夫され徐々に観察会が実施されるようになりました。会報とホームページを通じてその状況をお届けできれば嬉しく思います。(田守)



自然観察 2022年6月15日/第137号 年3回発行  
(会員の「自然観察」購読料と郵送料は会費に含まれます)  
発行 北海道自然観察協議会  
編集 北海道自然観察協議会編集部